

徒然なるままに…30

－教材選択から授業づくりへ－



平成27年6月3日
白鳥小学校 研修部

運動会が無事終わりました。皆さん、本当にお疲れ様でした。南校舎にいますと、グラウンドで練習する子どもたちの様子がよく見えます。知らず知らず、音楽を口ずさむことがあります。それぞれの学年の雰囲気とやり方で、演技を仕上げていく先生方の指導と子どもたちの仕上がりを一つずつ過程として見ることで、子どもの伸びようとする力を感じたり、子どもとともに演技を創る意味を考えたりしました。



それぞれの学年で、成果とともに、今後に向けての課題も見えてきたのではないのでしょうか。一つ一つの行事は、まさに、子どもを育てるチャンスです。教師側の見栄えや形の追求ばかりでなく、この取組を通して、子どもにどんなことを感じさせ、どんな力を付けるのかをはっきりと持って臨むことが大切だと思います。皆さんにとっては、今回の運動会は、どんなものになったのでしょうか。

さて、先日は、広島大学大学院 木村博一先生、指導第一課 筒井順也先生、奥村鯉都子先生をお招きして、全国大会における提案授業の教材論について検討しました。今回は、教材論を受けて、単元構成に落とす上で必要なことについて一考したいと思います。

一つ目は、ねらいや内容を絞り込むことです。教材について調べていくと、伝えたいことや考えさせたいことが広がっていくことがよくあります。しかし、それでは、子どもにとっても、授業者側にとっても、何を学習しているのかが分からなくなったり、焦点の定まらない、ぼやとした単元展開になったりしてしまいます。

例えば、2学年の「このまち大すぎ」は、地域の「まちたんけん」を通して、店や公共施設で働いている人たちと出会い、その人たちの仕事ぶりや思いから、自分たちの生活とのつながりを見つける学習です。「新白鳥駅」を取り上げ、新駅開設による街の変化を扱いたいとの話がありました。この単元展開では、「地域で働く人」と「街にある



施設の働き」という二つの内容・テーマが考えられます。そこで、どちらかに絞ってはどうでしょうか。

前者では、それぞれの人の仕事をする上での工夫や仕事への思い、人となりなど、細かく迫っていくことによって、地域での役割や仕事の意味、自分たちとのつながりについて感じるができると思います。

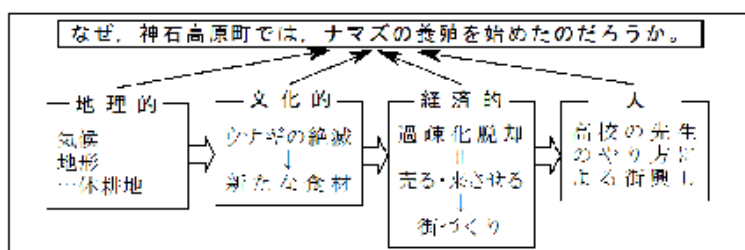
後者では、街にある店や施設の働きについて細かく調べた上で、観察や聞き取りなどから新白鳥駅開設による街の変化を見ていくことによって、施設と地域生活とのつながりを感じるができると思います。

「学び合いシート」の原理を含め、これまで、ねらいや内容の焦点化については、お話ししてきましたので、ご承知のこととは思いますが。

二つ目は、教材の切り口から単元構成することです。教材で考えさせたい内容に基づいて、単元を貫く問いを設定し、この問いにいくつかの切り口、「学び合いシート」でいう「着目点・観点」をもとに、学習(思考)を組み立てていくことになります。

4学年の「わたしたちの県の様子」は、神石高原町の「ナマズの養殖」を取り上げ、地域の資源を生かしながら

街づくりを目指していることを理解する学習です。この単元は、[資料1]のように、「なぜ、神石高原町では、ナマズの養殖を始めたのだろうか。」という単元を貫く問いに対して、地

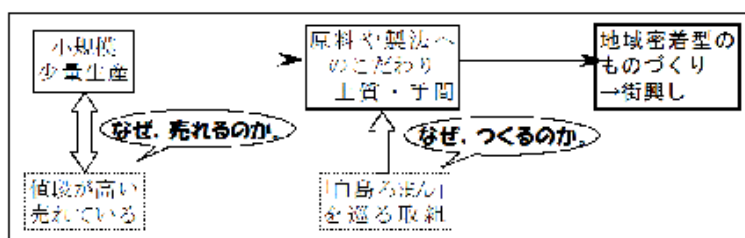


[資料1：4学年「わたしたちの県の様子」の内容構造]

理的・歴史的・文化的・経済的・街おこしをする人といった条件から迫っていく展開が考えられるでしょう。その際、地域の地理的・歴史的・文化的な条件があり、それを人々が生かそうとしているプロジェクトとして学習展開することになるでしょう。

3学年の「ものをつくる仕事」は、大量生産の工場と地域の酒造りを比較し、地域と

つながりながら、小規模ではあるが、原料や製法にこだわったものづくりを考えるという学習です。この単元は、[資料2]のように、大量生産の工場との比較から、小規模で少量の生産で



[資料2：3学年「ものをつくる仕事」の単元展開]

あることを明らかにした上で、他の日本酒よりも高いことを示し、「なぜ、売れるのか。なぜ、商売が成り立つのか。」という問いに至ります。そして、酒造りへのこだわり気付いていきます。さらに、白島商店会とともに「白島ろまん」をつくる取組について取り上げ、「なぜ、『白島ろまん』がつくられるのだろうか。」と問い、地域密着型のものづくりが街づくりにつながっているというように深めていくことが考えられます。これは、事実から問いを生み、新たな認識をし、さらに、事実から問いを生み、さらに認識を深めていくというストーリーで学習展開することになるでしょう。

3点目は、その授業で、社会のどんな動きを考えさせ、どんな社会を見せるのかを明確にすることです。教材の目新しさ以上に、この授業で、何がしたいのか、どんなことに、どのように気付かせ、感じさせ、伝えたいのかという授業のビジョンをはっきりと持って、教材構成→単元構成する必要があるということです。

鳴門教育大学の小西正雄先生が「提案する社会科」論を提唱されています。これは、「児童館をもう一つつくるならどこにつくるか。」「アジア競技大会に向けて私たちはどんなことをすればよいか。」などというように、身近な事象や架空の状況から論争問題を設定し、これに対する価値判断と意思決定の結果を「提案」し合うというものです。

提案型授業は、提案場面の把握の後、まず、生活経験や既存の知識に基づいて意思決

定を行います。その後、「提案のみがきあい」によって、自分の判断の正当性を説得するための合理的根拠（事実や概念）を用意し、提案します。相手は、それに対して、さらに合理的根拠を持ち出して提案します。それ故に、この授業論は、子どもの方向性に基づいて、自分の判断の正当性を主張する「出力型授業」と言われます。

しかし、判断・意思決定を行うためには、その根拠となる確固とした事実認識がなければ、単なる夢物語や論点のかみ合わない空中戦のような議論になってしまうという批判があります。つまり、「入力」なしには、「出力」できないということです。これと同様に、時事的な論争問題や現代的な社会の動きなどを子どもに提示することは、既存の知識を静的に与えるのではなく、現在、そして、未来の社会を見つめる上で大切です。しかし、単に与えるだけ、問うだけでは、子どもが迷うだけ、知るだけに終わってしまうのではないのでしょうか。論争場面や社会の動きの背景を把握し、いくつかの切り口・立場から、その問題性や意味を見出していく学習が必要だと考えます。

その際、持っておくとよいざっくりとした切り口は、「社会システム」のレベルと「人の心情・情意」のレベルです。例えば、「米軍基地の辺野古への移転」という論争問題を取り上げてみましょう。まず、日米安保条約を中心とした法的な内容や安全保障に関する国の考え方などといった、社会システム上の事実認識が必要です。と同時に、基地からの収入に頼らざるを得ないこと、基地による弊害が起こることに対する沖縄の人々の思いや願いを共感的に理解します。その上で、是非を判断することになるでしょう。これが木村先生のおっしゃる、「社会が分かる」と「人が分かる」という意味です。

示範授業や観察授業が始まります。その機会以外にも、子どもと先生方の発言のつなげ方や思考の練り上げ方といった学び合いの様子を覗かせていただこうと思います。授業はさておき、子どもは、日々取り組んでいかないと、一朝一夕には育ちません。全国大会は、いかに子どもらが活躍するかにかかっていると思います。先生方と共通理解し、よりよい授業へと検討できたらと考えています。あまり力にはならないかもしれませんが、どんどん私たち研修部を活用していただければ幸いに思っています。



先生方も、互いに授業を見合っただきたいと思います。我が家の澤田先生は、暇を見つけては、授業を見に来てくださいます。無様なこともあるのですが、子どもの様子や授業で不明だった点についてコメントをくださるので、自分の授業を客観的に見る手掛かりとなっています。

では、子どもの伸びを信じ、守りに入ることなく、「挑戦」をスローガンに、より新たなものを生み出していきましょう。

[参考文献]

小西正雄編著『「提案する社会科」の授業1』明治図書、1994

峰明秀「外国人労働者問題を考える」全国社会科教育学会『社会科研究』第42号、1994

拙稿「意思決定場面の『心理』を踏まえた社会科学学習指導過程」全国社会科教育学会『社会科研究』第49号、1998